

# 水牛通信

VOL.2 NO.1  
毎月1回・10日発行  
定価 200円

贈  
送  
口  
封  
土

## 声の輪をまわせ

高橋悠治

この雑誌の前身「水牛」新聞6号を八月に  
だしてから、こんなに時間がたってしまった。  
偶然にも一九八〇年一月だ。八〇年代にな  
かを期待して、いくつかの雑誌が創刊され  
つある。そのなかへ「水牛通信」もまぎれ  
むことになってしまった。だから、この雑誌  
をつくる理由と、雑誌の性格について説明し  
ておいた方がいいだろう。

「水牛」新聞をだすきっかけになったのは、  
タイの政治即興劇「みにくいJASEAN」  
上演や、タイで「生きるための歌」とよばれ  
る解放歌を訳してひろめる活動だった。本を  
よんでえられる知識や、いつてみるという経  
験からの理解につくしきれないなにかが、集  
団の表現とそれを準備する協同作業からあふ  
れだしてくる。そこには運動の文化への展望

が、たしかにあった。  
文化運動というものがあって、それはここ  
でいう運動の文化とはちがう。サークルをつ  
くって詩や小説をかき、歌をつくり、しばい  
をやる。よい作品をつくるのが目標になり、  
そのために個人が技術をみがくことを要求さ  
れる。こういうのが文化運動なら、それは専  
門家たちにまかしておけばよい。

よい詩や小説はいくらでもある。すばらし  
い音楽だって、たくさんある。それらをよん  
だり、きいたりすること、さらに本やレコー  
ドのかたちでそれらを私有することさえでき  
るのは、けっこうなことだ。しかし、それら  
はなくてもすむものだ。それらをしらなくて  
も、日はのぼり、日はしずみ、世界はかわる  
ことのないとなみをつづける。

詩は無用のもので、無用であることをほころごうとできる。それでも、無用のものは売ることができない。この状態をどんな作品ものりこえることはできない。作品がよくかけていけばいいほど、読者はよむだけでうごかなくなる。うごけなくなることを感動といいかえてもよいが、足がすくむだけでだれの生きかたもかえることのない感動をつくりだす作品活動は、作者をききつけ、ダメにする。まったくのところ、いまの時代に芸術家や教育者になりたい人間は、せつせと自分の足下を掘りくずす以外、することはないはずだ。

音楽家があつまり、音楽家にしかわからぬ音楽のはなしをして、たいしてききたくもないが、おたがいの音楽をきく。専門家のしているのは、こんなことにつぎ。音楽をこんなところにとじこめておくわけにはいかにない。

運動の文化は、どこにもない。ふみつけられ、かるくあしらわれ、流れのままにうごかされてきた人たちが、ふみとどまり、流れをさかのぼるために仲間の手をもとめるとき、表現の必要がうまれる。それはことばかもしれない。かたち、ひびき、身ぶりかもしれない。意味することはかんたんだ。「オーイ、

ここにいろぞ」というようなことにすぎない。

それは、いままでにきたことのない声であるはずだ。いままでの分類からはみだした表現かもしれない。「詩をかくのなら、このようにかくべきだ。ひきだされて尻をムチでぶたれても、これをかかすにはいられようか」という、キム・ジハの「五賊」のかきだしをおもいだす。このかきだしにつづくことばの洪水は、詩作品の枠におさまりきらない、意図した通りの流言蜚語ではなかったか。

それを詩作品として追認し、安全無害の芸術表現の自由と理解したのでは、ひとりの詩人を通じて声をあげた民衆運動の深さを見おとすことになるだろう。

一九六〇年四月十九日に立ちあがった運動は、十年間かかって、「蜚語」という表現をもつほどに成熟した。沈黙していられなくなった民衆の声は、蜚語となる。それはまだ解放された声ではないが、解放されたことばの影とでもいうべきものだといわれる。

韓国の若者たちは十年かかって、そのような表現にいたった。日本の全共闘世代は十年後のいま、からだの解放と料理法を論じている。こういう政治的成熟もあり、その上に期待される八〇年代もあるのだ。

さまざまな運動がある。声をもつことがついにできなかった運動もある。表現されない経験は共有されず、ひとりひとりの内部にすぎずみ、消えてゆく。

運動からうまれる表現は、運動について語ることはちがう。実践にたいする批判や理論は、方向をしめし、水路をひらいてみせることはできるだろう。方向がただしくても、その水路に水が流れる保証はない。

表現は、変形された経験であり、実践と車の両輪をなすものではなからうか。両方が同調してまわってゆかなければ、車はてんぶくしてしまふ。てんぶくしたのもしらずに走りつづける車もある。

日本で民衆運動がおこらないのも、運動の表現をかるくみて、文化をもとうとはおもわないから、経験の輪だけがからまわりをしていのではないだろうか。小さな運動体がいくつも、それぞれのやりかたにしがみつくなり、いつしよになってひとつのことができない。目に一丁字もないサムライがすみっこで刀をふりまわしているのだ。

アジア人民運動に連帯しても、アジアの運動がそれぞれの文化革命でもあることには連帯しない。キム・ジハの詩をほめたたえるの

はけつこう。しかし、かれが日本にうまれたとしたら、権力に弾圧される前に、大衆集会にあらわれるだけで、「ふざけた詩で、決意表明演説のじやまするな」と追いだされるのがせいぜいだらう。

「水牛」新聞にアジアでの、実にさまざまなところをのせても、日本の運動にそれらが活用されないなら、「水牛」はアジア民衆文化の専門家で、情報提供者という役まわりになつてしまふ。創造の火をかきたてないのなら、知識をつみかさねてもなにになるだろう。「水牛」派の文化運動をつくり、専門家をつくるような結果におわりたくはない。

民衆が文化をつくる。運動者自身が表現者でもある。この立場から、「水牛通信」という雑誌を日本とアジアのさまざまな運動からうまれる表現に解放すること。

この雑誌の編集者たちも、それぞれの場所で運動の文化にかかわっている。客観性をよそおう紹介や報道でなく、自分の責任でかきとめておくべきことがある。そういうこととに雑誌をつかうのも、紙面を解放するよび水となればよい。

活動からきりはなされた「作品」をあつめ、ながめることがだいじなのではない。集団の

表現活動から作品がうまるとすれば、そこにはかならず人たちのあいがあり、いままでになかったむすびつきがあるはずだ。しばいをつくる場合には、その過程はよくみえるだろう。個人の創作のかたちをとる場合でも、運動の表現であるかぎり、おなじ過程はどこかで作用していることだろう。表現が生きるためにつくりだされるなら、それは人間のむすびつきを組織する。

あちこちで人のちいさなうずができ、表現の火種がくすぶっている。「水牛通信」が培養基になるように。雑多な生命がそのレンズの下にゆきかい、であいがしらに火花をちらす。

いわずにいられないこと、かかすにいられないはなしは、どんなかたちをとるかかわらない。かたちをなさないかもしれない。しかし声をあげたとき、その声は自前のメディアをもたなければいけない。いまあるメディアは、いまの文化の価値基準でつくられているから、その水路にまよいこんだ水は、うすめられ、見わけがつかなくなる。川が地形を判断しながらまがりくねって海をめざすように、ついに人民の海にいたるべき水路は自力で掘りすすめるもの。

「水牛通信」は、本屋にはおかない。予約購読と手売りだけでやっていく。雑誌として自立できるためには、無償の労働力を前提として、七百人の読者が必要だ。日本のような消費社会で手づくりの流通ネットワークをつくるのはむづかしい。産地直送の無農薬野菜の方が高いのとおなじことだ。郵送費をへらすためには、最低千部の月刊雑誌であることが必要だ。この数字をけずるわけにはいかにない。一方で、読者が受身で、声をもたない存在になつてしまわないためには、これを無制限に拡大することもできないだろう。製作者と読者が、おぼろげにでも、おたがいの顔かたちがわかるような距離にあること、かき手は読者のなかにいることを保証するための、ぎりぎりのバランスだ。

実際には、いま「水牛通信」製作にかかわっている少人数では、数百人のネットワークをつくり、維持するのは、手にあまることだ。ここまでしんぼうしてよんだ人たちは、手をかしてください。

この雑誌が各地の運動の現場に、志ある人たちの手にとどくように、そこから火をかきたてる新鮮な風がかえってくるように。

# ただひとつだけを 言い切ることができる。

## — 湊川の田中正造劇・竹内スタジオの記録

一九七九年十一月十三日夜。兵庫県立湊川高校の創立五十周年学  
校祭において、「竹内スタジオ」のメンバーによる劇『田中正造』  
が、湊川の生徒たちの前で上演された。

だが、この劇の上演は、「ひとつの芝居が観客の前で演じられた」  
というレベルでは納まりきれない、別の方向性を持ったところみだつ  
たといえる。

この劇を演じた「竹内スタジオ」というグループは、演出家竹内  
敏晴を中心として集まった人々の総称である。その中心は「からだ  
79」というグループであり、それに宮城教育大の学生有志、外部か  
らの応援、湊川高校、尼ヶ崎工業高校の先生たちが加わっている。

この中心グループ「からだ79」について、竹内敏晴はこう言っている。  
「これは、言語に障害があるとか情緒に不安定なところがあるとか、  
総じて対人恐怖の傾向がある人たちが集まって、からだごと  
ばを解放するレッスンを続けてきたグループです」と。

一方、上演の現場になった湊川高校は神戸市にある夜間高校であ

る。この学校は、都市における被差別部落としては日本最大の番町  
地域に隣接している。被差別部落出身の生徒が全校生徒の六五％。  
昼間は厳しい労働に従事している生徒が大半を占める。ここ二〇年  
来、解放教育の最大の拠点校として知られている。

この「解き放つ」ということばを等しく持つ両者が『田中正造』  
という劇を挟んで舞台と客席の双方から出会った、というのがその  
夜の出来事の構図だった。

演出家竹内敏晴と湊川の生徒との出会いは、一九七七年の四月に  
始まる。当時、湊川高校の西田秀秋教諭たちの手によって進められ  
ていた、「授業の創造」というところみの一環として、生徒たちに  
「呼びかけのレッスン」を教えたのがそれである。それは林竹二氏  
による授業「人間について」のころみと同時であった。

その後竹内氏は、一九七七年秋と一九七八年秋の二回にわたって、  
ここ湊川で芝居を上演している。一本目は清水邦夫作「幻に心もそ  
ぞろ狂おしのわれら将門」。二本目は三好十郎作「斬られの仙太」

である。これら二回の公演は、今回とは違って「演劇」を志す人た  
ちの集まりである。「竹内スタジオ」によって演じられている（この  
人たちは現在「幽玄飛行」という劇団として活動を続けている）。

湊川との出会いについて、竹内氏は「客との出会いにおいて、こ  
れほどふかい体験はなかったと思うのです」と、林竹二氏との対談

（『学ぶことと変ること』筑摩書房）で語っている。湊川の生徒たちは、  
竹内氏にとってはまず、もつとも信頼できる観客としてあるようだ。  
一方「からだ79」の人たちは、竹内氏の「ことばが劈かれるとき」

をきっかけに、自分たちの身体を縛るさまざまな抑圧を、身体をひ  
らくレッスンを続けるなかでひとつずつ脱ぎ棄ててきた人たちであ  
る。芝居そのものでは素人に近い。この両者を強引に湊川の講堂で  
ぶっつけ合うこと。それが竹内氏のころみであったようだ。

では、なぜ『田中正造』だったのか。

『田中正造』を選ぶ背景には、一昨年から足かけ三年にわたって  
湊川で行なわれた、林竹二氏の授業「田中正造」があった。

足尾銅山鉱毒たれ流しと、明治政府の農民切り棄ての近代化政策  
によって、無残にも廃村に追い込まれた谷中村。そこにあくまでも  
残留し、その地において生を全うしようとする農民。彼らに導かれ  
自らもその中に飛び込み、「谷中人民」を名乗った田中正造。

この授業が湊川においてなされたことの意味は、きわめて大きか  
ったようだ（この授業記録は季刊『教育と国語』麦書房に掲載中）。  
はじめ竹内氏は、今回も前回と同じ「演劇」のメンバーで連う  
作品をやるうと準備していた。しかし、西田教諭の強い要望によつ  
て「田中正造」を二カ月で劇にしなければならぬところを追い

められたという。

その追いつめられた竹内氏が、劇『田中正造』を実現するための  
最大の突破口として考えついたのが「からだ79」のメンバーで公演  
をやるという決断だった。

「わたしのねらいは、谷中の残留民です。毒水の中に呑み込まれ  
ようとしている、破壊された村に、あくまでも残留した農民たち。

「ここしか、ここをぞいては生きるところはない」というそのこと  
が伝われば……」

公演後に竹内氏が語ったことばである。

（文責・堀田）

## 「からだ79」のこと 高田 豪

1 竹内敏晴の著書「ことばが劈かれるとき」が一九七五年八月に  
刊行されたことによって、役者志望以外の、竹内氏のレッスン受講  
希望者が増える。

2 そういう人々を中心として、一九七六年九月から、月一回、一  
泊二日の合宿形式による「混沌の会」がはじまる。

3 竹内演劇研究所の特別講座第三期（一九七六・十一月七七・三三）  
に、役者志望以外の受講者が増える。講座終了後、さらにレッスン  
を続けたい人々によって、「からだ79」の試みが生まれる。

4 「からだ79」——竹内演劇研究所が主催する、役者志望以外の  
人々を対象にしたはじめての講座。

5 特別講座第四期（一九七七・十一月七八・三）——「からだ79」

を一年間続けることが検討されたが、実現せず、さらにレッスンを続けた人は特別講座四期に入る。

6 「からだ78」(一九七八・五・七九・三)——それまでの経験から、自分たちが主体となってグループを組織し、レッスンを続けていくことにする。半年以上レッスンをした人を対象として呼びかけ、発足する。レッスンは週三回。八月にエンカウンター・グループを開き、十月に「ぶーたれ乞食」「はだしの青春」「仮面のレッスン」を公演。その後「どん底」上演に取組み、本づくりと稽古を中心にレッスンを続ける。

7 「からだ79」(一九七九・四)——これまでの竹内演劇研究所スタジオにかえて、現在のライヒ館を借り、床張りをして、専用のレッスン場とする。

七月二十七日～三十日——『どん底』公演。

五月～十月——竹内演劇研究所主催「からだ」とことばの教室」にスタッフとして参加する。

現在は「からだ79」の主催で、「からだ」とことばの教室」(PART II)を実施中。

九月～十一月。湊川高校で『田中正造』を上演する。

この三年余りの間に、いろんな人が加わり、また去って行った。去った人のなかには、すぐ来なくなった人、自分なりになにかを見つけて来る必要のなくなった人、見切りをつけた人、失望した人、それ以上どうにも入り込めなくなった人などがいる。

いま残っているわれわれは、どうしてもこのレッスンという場か

にいる自分のことを、じつに素直に、ウジャウジャと語るものであった。

話合いが終った時、私は、彼らのうちの一人も積極的に反対でないこと、むしろからだはやりたい方向に向いていて、自分の火種をすでに捜しはじめていることに確信を持った。私は、彼らの一人一人が谷中のなかに本当の火種を見つけるための資料の収集と開示を自分の仕事にしようと決心し、まず資料集めに奔走した。

今度の芝居の幕開きとラストに歌われた「鉱害悲歌」は、この折に田村紀雄氏から紹介され、天野茂氏の「鉱害文学の源流」という論文(『田中正造研究』第七号)に導かれて、板倉町町史編さん室の宮田しげる氏を訪ね、録音保存されていたものをコピーしていただき、そのうちの一つを生かしたものである。

次の大きな作業は、十月第一週に行われた構成案作りの合宿であった。合宿は、「からだ79」の参加できるメンバー全員で行なわれた。今回の「田中正造」のしんができた大事な作業だった。

私は自分の映画作りの経験から、何人かの執筆担当者だけが合宿して第一稿をものし、それを全員に提出して、討論と推敲を重ね、仕上げるといふ経過を想定していた。ところが「からだ79」の三好君は、全員が最初からその作業に参加することをがんとしてゆずらず、そんなに大勢でどうやって進めるのかという質問にも、全員でやることを外したらダメだという返事しかくれなかったのである。

時間がないから効率よくやらねばならないと思ひ込んでいた私は、今回はその方法では間に合わないのだが、と不安で不安でしょうが

ら離れられない。そのなかにも、「自分のやりたいことを探る場だ」「他に行くところがない」等、いろんな関わり方がある。文章化するような方針や展望はなにもない。

## 私の体験・その一 惣川 修

九月七日の夜、竹内氏は「からだ79」のメンバーに、湊川行きを相談をかけた。この時の竹内氏の決意表明と言うか、訴えはすさまじいものであった。その内容を私に印象深い順に列挙してみる。

①湊川のある生徒たちに出会いたい。三年前から「幻に心もそぞろ……」「斬られの仙太」とやって来て、もうひとつ出会えていない。今度の機会を捨てきれない。

②今度の芝居は、「からだ79」の人々がまっすぐ語りかけていくことによって成立するのではないか。

③人のからだはがどどん殺されている。人が生きられるところではないここで、生きることを覚悟するか、しないか。十九戸の残留民はなぜ谷中村に残ったのか。

④あなた方と一緒にその仕事をやってみようという気持である。竹内氏の告白を聞いていて、私は感動した。また、竹内氏の訴えに対する「からだ79」の人々の、自分に正直で頑固な対応にも心を打たれた。彼らの対応を詳しく述べることが不可能であるが、要するにすぐには乗らないのである。「竹内さんがそうであるとしても、自分がやることの意味が、そうすぐにはつかめない」というところ

なかった。

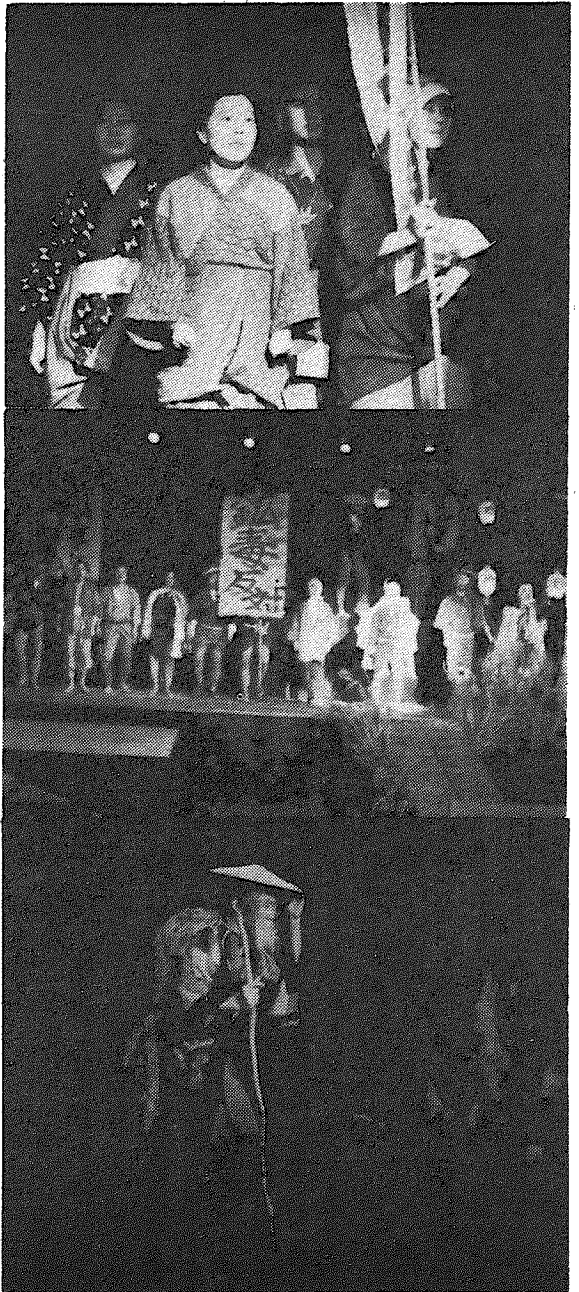
三好君は「先が見えてあせっているのは、竹内さんと惣川さんだけだ。僕らにはわからないからね。ハハハ」と笑っている。まことに困った。にくたらしい感じだったが、そこには「からだ79」の人々の動かしがたい存在感、尊厳のようなものがあった。

合宿は、たまたま家族が留守だったこともあって、私の家で行われたのだが、せいぜい五、六人で一杯だと思っていたところへ、常時十人ぐらい、多い時は十五、六人も集ってきた。

はじめの二日間ぐらい、私はウロウロしていた。ところが各自、好き勝手に資料を読んだりしゃべったりしているうちに、なにかが動きはじめた。たとえば、大鹿卓氏の「谷中村事件」や日向康氏の「果なき旅」などの小説のシーンを、読み合せする。地の文を読めれば読み、会話を役に分ける。すると、自分一人で読んでいたのはまったく違う世界が現出するのである。一つの会話文でも、自分一人で読んでいた場合には、その人物は自分の想像力を越えることはないのだが、自分以外のだれかが読むと、そこに自分の知らない、知りえない個人的謎に満ちた他人が現出するのである。それはおそらく、作者の意図をも創造力をも越えたものであったろう。

私はこの不思議な体験のなかで、集団が考える、他人のからだを通して考えるということを感じたのだと思う。

なかでもっとも圧巻だったのは、かつての谷中村の屋敷や住人たちのスライド(私が撮影してきた)を映して、当時の渡良瀬川と谷中の堤防の位置をたしかめるために、現在の地図に明治十七年に製作された地図を重ね合わせてみた時、その頃の谷中村がスラ



イドの光のなかにありありと見えたことであつた。

いま考えると、あの合宿ではじめて、「からだ79」のメンバーのなかに「谷中村問題」が成立したことが判る。そういう事態を作り出す方法が、三好君たちの「全員参加」という考えのなかにあつたのである。もしも私が想像していたような、手慣れた効率的な方法で作業が進められていたら、おそらく、こういう基盤は生まれなかつただろう。

ドラマの大きな構成案は竹内氏から提出された。幕開きの大押し出しから、正造の死に終る構成の基本線は、そこですでに姿を現わしていた。

- ① 大押し出し（鉦毒悲歌）——正造の議会での演説  
女房押し出し——正造の議会での最後の演説  
買取され立ち退く谷中村民——議員を辞めた正造の関わり方
- ② 十九戸の残留民——正造はどのように居たか

強制破壊——正造はどのように居たか

仮小屋に住みつく残留民——正造はどのように居たか

洪水のなかの残留民——正造に見えていないもの

残留民の死によって語られる本心——正造に見えてきたもの

③ 残留民と正造が一つになる↓その闘い↓正造の死（鉦毒悲歌を歌って、かっいでいかれる）

もちろん幾段階もの構成案があるのだが、どういうことを頭に描きながら、その後の作業が続けられたかを解つてもらうために、右の表をあげておくことにした。

これだけでは、いわゆる筋書き、説明劇の印象も免れえないだろうが、そういうものを作ろうとしていたわけではない。出産すべきものをすでに孕んだ者たちが、完全な出産の構造をさぐっているメモとして見ていただくと事実に近い。

#### 四

私は最初の打ち合わせの時、谷中村と残留民の生き方のなかには、ほとんどあらゆる人々にとつて、いまをどう生きたらよいのかさぐる上での、のっぴきならない事実（まだ明らかにされていないことをも含めて）があると思うので、それぞれ、思いっきり個人的な立場からそれを見つけてほしいと言つた。

各シーンの資料をつなぎあわせただけの構成案をつくり、それに命を与えてゆく作業は、いわば無言のうちに各自のそれを明らかにしてゆく作業でもあつた。

全員が各自で積極的に真剣になるというのには、もうひとつ、という状態がかなり長く続いたような気がする。本番の客を前にする

までそうなれなかつた人もいた。だが「松右衛門と吉松の落ちる場」が生まれ、読み合わせをした時に、その半分は埋められたように思う。松右衛門をやつた吉岡君は、あの場の清書をやりながら「ゾーッとした」、そして「今までまだ半分もできていなかったんだ」と思つたと言ふ。的を射た発言だと思ふ。ともかくあの場ができて、全体に緊張がたかまり、スジが通つたことは間違いない（それだけに、あの場についての吟味がこれからの課題だといま私は考えている）。

### 『田中正造』をやつて 三好哲司

上演があつて、2週間余り経つた訳だが、何をやり、何が起つたのか余りよく判らない。まとまつたことは書けそうもないので、考えていることを思い付くまま並べてみる。

1 一番よく判らないのは、湊川に行く前の、東京でのけいこ・準備の段階で、みんなの中にあつた「不満」が、なくなつたとまでは言わないが、余り感じられなくなつたことである。皆の中で何が起つたのであろうか？ 僕個人としては、湊川での本舞台でも色んな体験をしたが、それ以上にそれまでのけいこ段階での体験が大きな比重を占めているので、皆の中で起つたことをもう少しききたい気持がある。

2 十月のはじめに十日間ほど、惣川さん宅で、「田中正造」の大体の骨格を作るために、合宿をした。その過程で、今の自分には他人の作つてきたものに口は出せるが、正造についてオリジナルな考

えを出せないことが段々とはつきりしてきた。それで、構成は主に竹内・惣川さんにまかせ、次回のために自分はひたすら吸収する方に向った。この時同時に今回は、田中正造の言語をどこまで言いきるかに自分を賭けようと思った。実際やってみて、どこまで言い切れたかなどということとはさっぱり判らないが、今回の「田中正造」に関して言うと、前半（大雑把な言い方だが）に好きなものが多い。3 けいこが始まって、初めの頃一番頭を占めていたのは吃るということである。これまで何本かやった芝居の経験で、台本をとってセリフを覚えてしまえばそんなには吃らないことはある程度判っていた。しかし今度は、セリフの量が全然前とは違つたし、苦手である朗読が多かつた。会話では余り吃らないが、朗読ではまだ吃るという気持が強かつた。しかし逆に、朗読で吃るということに手をつけたいという気持があつたので、吃つた時に思い切り吃つてやろうと思つた。これは吃りでない人には少し説明しないと判らないと思うが、吃りというものは、吃りそうだと感じられた時にいゝんなことをするものである。別な語に言い変えたり、「エート」などという間投詞を入れたり、間を置いたり、黙つてしまつたり、要するに、吃り避けるために考えるかぎりのいゝんなことをするわけである。それに対して、この思い切り吃るといふことは、避けるということとを一切しないで、吃るといふことにその時突入することである。何回かやつている内に、からだに充分にほぐれていくと、特に「へそ」の辺りがゆるんでいくと、腰がわかれて、大地に踏んばれるような状態であると、吃るのが少ないし、吃る構えに構音器官が入つた時——いくつかの箇所の筋力が異常に緊張している——でも思

さん着込んでひたすら横になつていた。昼に熱を測ると37度6分あつた。竹内さんに今日はからだの調子が悪いので少し頑張らないでやりますと何度も言い出しそうになりながらも、結局どういふわけか言えず、その日はフラフラのまま何とかけいこをやつた。今日はかなり手を抜いてやつているのに、他の人には余りその差が判らないのかと思ひながらその日を終えた。

次の日になると熱はなくなつていて、前の日にあんな状態でもやれたんだから、そんなに頑張らなくてもいいんだという気持になり、すこく楽になつた。僕にとつてはこの日が今回の体験のピークだつたと思う。本番の前も主観的には余り緊張していなかつた。もつとも本番が終つた時、からだ中がスツと楽になり、それまで緊張していたことが判りびつくりしたが。

5 本舞台での事では、正造の議会での二度目の演説を始めた時である。「今日の質問は亡国である……」という言葉から始まる演説なのであるが、演説が始まつても観客がこちらを向かないのである。その前に女達の押し出しの場面があり、警官隊が農商務省の前に座り込んだ女達をこぼす抜きにしているのであるが、その場面が面白いらしく、正造の演説が始まつてもこちらを向かないのである（正造の演説は女達の押し出しの場とは別舞台で行なわれた）。

そこでちよつとあわてて必死になつて向こうを向いている人達にこつちを向せようと思つて話しかけた。その時に観客に向つて話しかければいいのだということが判つたみたいである。それまでの演説は、想像上の議会で大臣及び議員に話しかけているのを観客に見せていたのだということが判り、もつと直接に観客に話せばいい

い切り踏んばつて強行突破が出来るということが分つた。しかし、一たん吃ると筋が異常に緊張して、弛緩するまでに時間がかかるので次の吃音を誘発するということもある。だから吃音のひん度が頂点に達したと思つた時に、早くセリフを覚えてしまおうと思つた。

セリフを大体覚えてしまつた案の上吃りは少なくなつたし、竹内さんが杖を使って踏んばる（つり上つている上半身を下へ落す）ことを覚えてくれたので、吃りのことが頭を占めることは少なくなつた。

4 今度の役は現在の自分のからだの限界を越えている過大なものであると思つていたので、毎日必死であつた。マラソンをしてからだを生き生きとさせ、それからからだをほぐし、できる限りからだに準備して、吃ることは続いていいたし、前日ある程度ほぐれても、あくる日にはまたもとのからだに戻つていて、毎日始めから必死でほぐさなければならなかつた。

セリフを大体覚えて始めて通しらしいものをやつた時に竹内さんからみんなに話があつた。今日の通しをみて自分の考えが間違つていないことが判つた。「からだ79」の、特に三好の観客にまつぐ話しかける力にかけるといふ内容の話があつた。

この話を聞いて、竹内さんの考えも判らなくはないが、非常に不可能な事を考えるなと思ひ、負担に感じた。そうしたら案の上、その二日後に発熱し、頭にオデキが出来た。下痢もしていた。その日は朝からからだだるくて、マラソンをする気にならず、公園までようやく歩いてたどりつき、日の光の中で少し寝て、けいこ場にもどつた。けいこ場にもどつても、からだをほぐす気になれず、たく

のだということが判つた。そうすると、観客がシンとして聞いているような気がした。後は正造の出の時客は比較的シンとして聞いているような気がした。

6 女たちの押し出しの場で、遠くから「からだ79」の女たちの声を聞いていて、大学出の女とそうでない女の声に明らかに差があることに気が付いた。大学出の女の声はか細くてよく通らなくて悲鳴の様な声である。それに対してそうでない女の声はよく判るし、力強く、生きていて、教育というものは恐ろしいものである。今の教育は人のからだをかんまん殺しているようなものだと思つても、こんなにあからさまにそのことがみえると、今さらながらにおどろく。

## 湊川の『田中正造』 小川正巳

それは既成の商業劇場でもなく、各地を移動してゆくテントでもなく、学校の講堂であつた。「田中正造」が上演されたのは、神戸の番町部落のなかにある湊川定時制高校の講堂。林竹二の「人間について」の授業を、どこよりも深くうけとめる生徒たちのいる湊川高校。それ故に田中正造が谷中村にはいつたように、林竹二が「教育の再生」を求めて、はいつていつた湊川。林竹二とともに、湊川にはいつて、そこで演劇の原点を見出した竹内敏晴が、その湊川高校創立五十周年記念の行事として、まさにその『田中正造』を上演したのが、湊川高校の講堂であつた。それは象徴的な事件とも言うべきものであつた。この地にあつて、解放教育のはしくれに連なり、

かつて林竹二の授業に参加させてもらい、芝居も好きな私は、かねて久しく竹内敏晴の湊川での芝居を見たいと念願していた。

講堂一ぱいに、卒業生らしい青年のエレキ・ギターと歌とが満ちあふれ、会衆一同陽気であった。私は一抹の不安をおぼえた。これはとても、「田中正造」をむかえ入れる雰囲気ではない。だが芝居ははじまった。谷中村の村民の怨恨と怒りをこめたような太鼓のどろきが、講堂からエレキ・ギターの余韻を瞬時にして駆逐し、私たち観客の背後からおどろおどろしい鬼神とともに描かれた谷中一円の地図が大きくかかげられた正面舞台へ集まってゆく谷中村民の姿は、これもまた瞬間にして講堂を谷中村に変えた。私たちはすっぱり谷中村につつまれた。それでも観客の一部は抵抗した。自分たちの日常を奪われまいと。それは丁度激しい嵐で、海の表面が浪立つような具合であった。その浪立つ表面のしたには、次第に関心の重いひとみがくろくろと形成されていった。平舞台の左右につくられた補助舞台とともに、並列舞台に包囲されて、私たちは次第に谷中村そのもののなかにいた。

いま手許にプログラムもなく、私には記憶しかない。私はもう一度、かつて読んだ林竹二の『田中正造の生涯』をとりだして、頁をくりながら、芝居の記憶と照合して、田中正造を考える。太鼓のどろきに重なる、官憲の迫真力のある暴力が、情容赦なく谷中村人民のうえに、私たち観客のうえに襲いかかってきたのは川俣事件であったのか。上手の補助舞台で警察権力を正面にすえて、議会議争をしていた田中正造は、そのあと平舞台の谷中村に入る。銅山にたいして無政府であり、人民にたいしては有政府であった

して、人道に訴え、憲法に訴えて解決しようとした」のだ。しかし亡村残留民の深い抵抗を体験した後、正造は「谷中人民の保護者、指導者としての立場をすてて反対に谷中人民に帰着する意志をかため」た。谷中人民の「外に」いた正造は、今や「悔い改めて」、その「人民の一人となり、人民を同志とする」ようになった。

しかし、谷中人民の一人となった正造は、次のように言っている。「谷中人民は自家有形の所有財産を奪略せられたり。今度は、無形の智識財産なり。或はこれをも知らざるべし。自己所有の無形の智識財産の価をも知らざるべし。価を知らざれば、価なしです。あれどもなきと同じです。無形所有の価を知らば谷中人民。知らざれば無安心。この上なく不安心。見よ、神は谷中にあり聖書は谷中人民の身にあり。」そしてこの「神」も「聖書」も修辞ではない。

やがて、大正二年の田中正造の臨終と葬儀。正造の遺体は、谷中の人民たちに担われて、私たちのなかを通りすぎて行った。

「湊川における解放教育運動を、私ははじめは、谷中村に入った田中正造の戦いとぼんやり結びつけて考えていたんですけど、実は谷中村に残留した残留民の戦いなんだということを、こんど改めて考えられるようになった。田中正造じゃなくて残留民なんですね村から逃げないで、そこに踏み止まっているのは」と語っている林竹二——私には、谷中人民に担われて私たちのなかを通りすぎて行った田中正造に、林竹二が重なる。

帰りの階段の両わきに列んで拍手する劇団のひとたちへ、私は心からなる感謝と感銘の拍手をかえしながら、冷たい夜の夜にのやかに

明治政府は、鉅毒停止命令を鉅毒予防命令にすりかえ、さらに予防命令を治水工事ですりかえた。明治三十五年の大洪水、対策としての遊水池計画、そのための渡良瀬川改修計画。そのため堤防修復の名目で谷中村買収案が可決。このような状況については、私たち観客は、役者から、講堂正面の地図を用いて、丁寧な学習をうけた。買収は、一戸ごとに、サーベルをおびた官憲と、「泪金」を渡す役人のコンビによって、情容赦なく行われていった。一方「急水どめ」のための村民の堤防づくりも、河川法に違反するといつて、官憲の手によって阻まれるのを、私たちは見た。

私たちは、谷中亡村残留民の、「圧迫、迫害、誘惑」にもかかわらず、「とどまること」を選択するという闘いの深さの一端を眼のあたりに見た。「我々は世に如何なる法律ありとするも、官吏が人民の家屋を破り、田圃を奪うに至ってはもはや、生命をうばわれるほかなしとの決心に候」明治三十七年に谷中村に入り、明治四十年の谷中残留民のこの深い抵抗を全身で体験した田中正造はどうか。上演当日、肝心の正造役者が、正造役をまだ完全にこなし切っていないせいか、迫力を欠いた。だがこの谷中亡村残留民の「とどまる」という深い抵抗を「苦学」して、「悔い改めた」正造の心身を舞台に形成することは困難なことであろう。それはラディカルな思想でもあからだ。

明治二十四年に帝国議会で、鉅毒についての質問書を出して以来、谷中残留民の深い抵抗を体験するまでの正造にとって、「谷中の残留民は、いつまでも彼の保護下にある可憐な人民であった」。正造は谷中村人民の「外に」いて、かれらのために、「社会にたい

## 軽気球舎

写植・版下・和文タイプ  
レタリング・デザイン

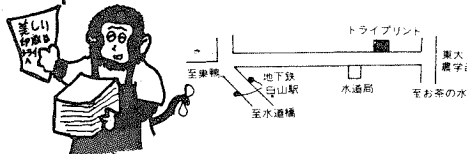
○雑誌・パンフレット・チラシ  
等の製作お引き受けします。  
○印刷・製本はもちろん、  
編集作業も請け負います。

〒160東京都新宿区高田馬場二一七—一  
コーポ高田三〇六  
日本アジア・アフリカ作家会議事務局内  
☎二〇五—二七九四

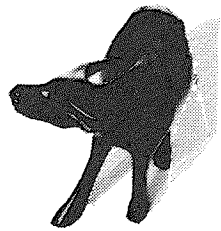
## チラシ・文集の 印刷はおまかせ

文集・パンフレット・チラシ・事務書類・  
ハガキ・案内状などのタイプ・印刷を承ります。

あなたの手書き原稿もそのまま印刷でき、  
しかも縮小・拡大は思いのままです。電子製  
版機と高速オフセット印刷機の組み合わせで  
これからの印刷は、速く、安く、そしてきれ  
いに。どうぞお気軽にご相談下さい。



タイプ・オフセット印刷  
株式会社 トライプリントショップ  
文京区向丘1-3-7 ☎ 814-3780



# “水牛”雑感

畑野 潤

「スイギユウ」と声を出してつぶやいてみる。なんとなく言葉の語感のする言葉だ。「ギユウ」という音が、「ギユウギユウ詰め」や「ギユウツと言わせる」などの「ギユウギユウ」(副詞)を連想させるためであろうか。もつとも、水牛は日本では見かけない動物なので、スイギユウという言葉がふだん聞きなれていないせいもある。だが、これを「水牛」と文字(漢字)で視覚的に表してみると、たちまち格好のよい姿に一変してしまう。水牛は、水神、水軍、水天宮、水月などと同様に水と他の名詞との複合語の一つだが、これらの語を目で見ると、「水」のイメージがきわめて強烈なことに気づく。してみると、水牛という単語は耳で聞くよりも、漢字(表意文字)に表して視覚的にみるべきものなのだ。水牛——水辺に棲息する牛の一属——、この動物の名称としてこれほど適切な言語がほかにあるうとは思えない。

東南アジアの各地の農村を旅していると、いたるところで水牛の姿を見かける。一年を通して雨の多いジャワ島などでは、水牛の体はいつも水に濡れてつやつやした黒光りを発していて、実に気がよさそうだ。犁(すき)を引いて田畑を耕したり、耕起し

た後の大きな土の塊をくずして細かくしたり、田畑を平らにする農作業の時などは、たいいて二頭の水牛が横に並んで農具を引き、その後にはムチをもった農民がついて歩いている。田植まえのしろかきの時には、人間の足がひざまでつかる泥田の中を、水牛は少しの危げもなく固い土の上を歩くのと同様のスピードで四本の足を運んでゆく。この曲芸の秘密は、どうやら幅の広い蹄にあるようだ。農民はムチをもっているのだが、そのムチで水牛を打つことはほとんどないといつてよい。農民の発する掛声による合図を水牛はよく理解していて、農民がムチをふるうまでもなく、動、静止、左右回転など実によく「言うことを聞く」からだ。

古い稲作の伝統をもつジャワ島の中部地方では、水牛を使つてしろかきをしている農民が、あちこちの田でお互いの美声を競うかのように大声を張り上げて「田作り唄」を歌っている。水牛はどこかの国の首相まがいに一般に寡黙で鈍重な家畜と言われているのだが、ここでは農民の歌声に調子を合わせてきびきび働いていたのだ。唄の合間にはいる掛声は、そのまま水牛の動作への合図となっていた。日本の労働の唄は、機械化の進行と、もつたいぶつた「正調」民謡の普及とに反比例してすたれてしまった

のである。

水牛の仲間には、南アフリカなどでいまも野生種のまま棲息しているものもあるが、大部分のものは家畜化されて生きている。水牛の動物分類学上の位置は、背ついで動物門——ほ乳動物綱——偶蹄目——反すう類——ウシ科(ウシ属、ヤギユウ属、スイギユウ属)となっており、スイギユウ属にはインド水牛、アフリカ黒水牛、アフリカ赤水牛の三種がある。各属の間では、たとえばウシ属とヤギユウ属との間には雑種ができるが(その子自体は雄は生殖不能)、スイギユウ属はそのどちらとも子供ができない。染色体の数を見ても、ウシ属では六〇、スイギユウ属では四八と

湿潤な熱帯に適した水牛が、中近東の沙漠の中のアシスやナイル川流域などのような極乾燥地で家畜として農業に従事しているのを見るのは驚異である。この地域では、普通の牛と水牛とが一頭ずつ横に並んで犁などの農具を伸よく引張っているのをしばしば見かける。極端に乾燥した大気の中で強烈な太陽に照らされて、水牛のあのつややかな黒い肌はかさかさ乾き切つて無残である。口からは白い泡を出し、よだれを長くたらししている。背中から一直線にのびる首と頭は、さながらアゴを出したといった格好である。一方の牛はといえば、さして汗をかいた風もなくアゴは下に引いたまま歩いている。これではいかにも水牛だけが働いていて、牛はズルしているみたいである。確かに水牛の方が牛よりも力はあるのだ。それにしても水牛をこんな極乾燥地にまで連れてきて酷使するのは、ヒト科の動物はなんと得手勝手なのだろう。

加藤儀一の『家畜文化史』によると、ウシ属の仲間のヨーロッパ原牛が最初に家畜化されたのは、いまから七、八千年前、西部アジアのどこかであったろうと推定されている。人類最古のメソポタミア文明もエジプト文明も、家牛を使った農業を基盤として栄えたものである。しかし、農業が高湿多湿な南アジアや東南アジアで営まれるようになった時、従来の家牛はこの地域では病気に

休憩時間の水牛は、待っていましたとばかり、近くを流れるかんがい用水につかつかつて冷をとる。よく見ると、さつきまでアゴを出していたかに見えた水牛の首と頭は、首まで水につかつかつた時でも自然に鼻の穴が水面上に出る構造になっているではないか。その姿は、いい湯だな、と鼻歌まじりに歌っているかのようだ。

この地方に土着した人間は、高温多湿の気候、土壌に適した作物としてコメを選んだが、やがてかれらは普通の家牛にかわるものとして、湿潤熱帯に棲息している野性水牛を選び、これを馴らして家畜化することに成功したのである。

湿潤な熱帯地方の動物水牛は、必要な温度と最少限の水さえあれば、どんな乾燥地帯にも人間に従つて忠実についていく。ただし水牛は寒さに弱い。そのためこれまでのところ冬の寒さがきびしい日本本土への進出には成功していない。「水牛」がどこまで寒さに耐えられるかは未知数である。



# 六穴砲崇拝

金芝河



金芝河の詩によるコンポジション・幻燈による第三回作品

## 蜚語

六穴砲崇拝

絵 富山妙子

訳 李 銀子

朗読 伊藤惣一

音楽 高橋悠治

映像 前田勝弘

撮影 本橋成一

構成 大岡竜一

上映時間14分 カラースライド65コマ

スライド・テープ共 販価一万五千元 貸出し五千元

申込先 火種プロダクション 東京都世田谷区桜丘4-16-2

☎03(425)6095

匿孫 辛亥の年のある日のこと

大王・姪禽 一揆のものどもを大いに討ちやぶり祝宴を張ったその席に

一匹の大蛇あらわれ 垂木に巻きつき くねくね くねっていたが突然 跡形もなく 消えてしまったあと

出入りを禁じ

一方で良薬を求めて

墮胎なされませ

ホホー して いかなる薬が最高の効き目ありと申すのじゃ

生きた人間の肝 三千万個ほどをめしあがれば 効き目はてきめん

でござりまする

なかでも 共産党の肝が 毒々しさでは名をあげており 特効薬と

申せましょうが

どいつもこいつも捕えて食らい 種が尽きましたれば

毒々しさではその次をゆく 耶蘇のやつらの生肝がよろしいかと存

じまする

ことに近頃その者たちは 夜な夜な墓地に集まり

天子様のおからだに 怪しき兆ありと流言蜚語をとばしております

る

一石二鳥 一挙兩得 王手飛車とりののはさみうちではござりませぬ

か

かくて大王・姪禽は ある日

国じゅうの耶蘇のやつら

そのなかでも もっとも毒々しさで聞こえたものどもを選びだし

小さな教会にあつめて 曰く

汝ら耶蘇 および 天主教のものどもよ よく聞け

汝ら もとより卑しき大工の分際で

朕の世の盛りに生をうけ 日々のくらしにこと欠かぬは これ朕の

大いなる恩寵のたまもの



姪禽は 正体不明の病をわずらい 日に日に腹がふくれあがった

洋医のくれる百薬 すべて効き目がなく

ついに木寛山中の占師を呼びよせ

朕のからだは かくかく しかじかなるがゆえ

いかなる病であるか まずは言うてみよ

そこで占師 眼あけたりとじたり 閉じたり開けたり

白目むいたり 黒目むいたり

指を折り折り しばし独り言をつぶやいたあと

姪禽の耳もとに口をよせ 声をひそめて言うことには

ご懐妊でござりまする

な、な、なんだと? 懐妊? 男が子をはらむだと?

お子ではなく卵でござりまする 蛇の卵でござりまする

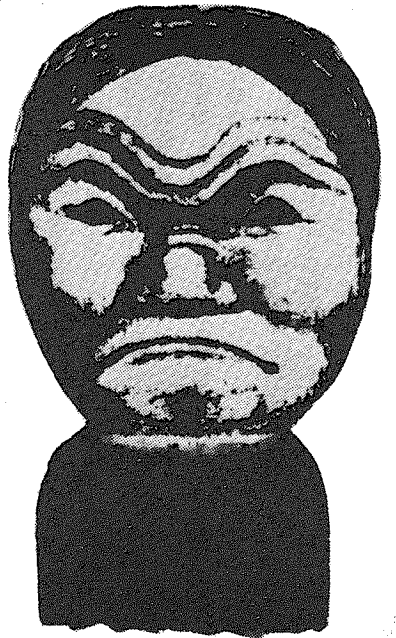
な、な、なんだと? 卵? それも蛇の卵をはらんだと?

おいたわしいかぎりでござりまする

ウーム なんといい情けなさ して これより如何いたせばよいの

じゃ

内外の口を封じたうえ



歴代皇祖のおしえにそむき 耐えがたきを耐えて 汝らを生かしおくも すなわち朕の徳のいたすところ  
汝ら鳥獣にあらずして なぜ感泣せずにいられようぞ  
朕は 近頃 どうしたことが重い病をわずらい 骨と皮が相接するほどじゃ  
生きた人間の肝 そのなかでも 汝らの肝が この病には 一番とのこと

ためらうことなく 腹をかつきばいて生肝はすべて捧ぐべし  
平素の恩恵に応えるのは このときじゃ  
おわりに 汝らに嚴重に嚴重に 申しつけておくが  
生肝を捧げたあとは かたく口を閉ざすのじゃ  
万が一 生肝を捧げたことを 口外したときには  
世を悪わし民をあざむいたと見なし 三族を 滅ぼすであろう

クワン!

空砲一発 ぶっぱなした。

ぶっぱなして 意気揚揚 ぐるりとあたりを見渡せば

これはいかに まばたきする者一人とてなく 銘々 口々に ヒン

ヒンヒン

妊娠 あきれはて

グルリ グリ あちらこちら この隅あの隅 グルルツと見渡せば

後の壁に ちっぼけな

いともちっぼけな 十字架に架けられ死んだイエスの像に目がゆく

ハハーン これでわかつたぞ

おのれらが何を信じ ぶざけているかと思えば

あやつを信じて のぼせておったか

朕がこの世で なによりも 見たくないのが あのイエスの奴のつ

らじゃった

この世の苦しみ 人間の悩みごとを何もかも 自分ひとりで背負つ

たかに見せ

たかが大工の分際で 出世欲に汲々とし 神の子と称しては 世を

惑わし 蜚語をもって民をあざむいた奴

あざけられるも当然 死ぬも当然

大羅馬帝国の力を 一体なんと心得ておるのじゃ

信ずべきものは イエスの奴ではなく

ひとえに この六穴砲のみ

朕が あれを ただちにこの六穴砲で 撃ち 殺すからして 眼か

つびろげ とくと見ておけ エイッ!

言い終るか終らないうちに 片隅から鋭い声  
くそでもくらえノ  
この声に 怒り心頭にはった妊娠  
す早く右の手を内ポケットにすべりこませたが 生肝食いたさに  
ぐつこらえ

朕も王者

良心もあれば体面もある

どうして汝らの肝を永遠に持ち去ろうか

朕のからだか回復したあかつきは 時節をえらび

肝をつけもどしてやろうぞ 心配するな 心配するな

と間髪を入れずに またもやどこかの片隅から

とぼけるんじゃねえノ

妊娠したお方は とかく神経がたかぶるもの

こらえきれずに妊娠 どうとう怒りを爆発させ

内ポケットから どす黒い六穴砲 ヌツととりだし狙いをつけて

これでもか?

すると あちこちから キャララ キャラララッ笑って のたう

ち コロコロ ころがって

いまだき拳銃見たことねえ奴がいるものか

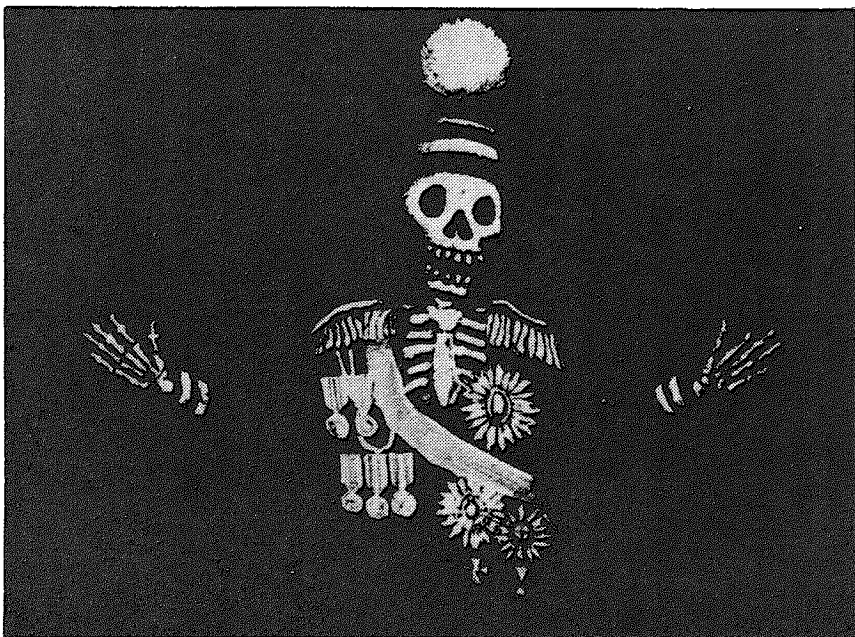
撃てるものなら撃ってみろ 撃て撃て撃て どうせ にせの拳銃だ

撃ってみろ ほら 撃て

ひと思いに ぶっ殺してやりたい気持は

へばりつく餅のよう 噴きあがる煙のよう されどわが身可愛く

ひたすら生肝食いたさに



バーン!  
と撃つやいなや  
トクトクトクトク

真つ赤な血が たぎり とめどなくわきあがり  
あふれ ダラダラダラダラ 流れおち 教会じゅうに満ちみちた  
うろうううう——

坐っていた耶穌・天主教のものども いっせいに立ちあがり うめ  
き声をあげると 姪禽めがけて 押し寄せた  
気もどうてんの姪禽 そのはずみに みなが みているその前で  
ククンクン 苦しげに体をよじらせる

黄色い大蛇の卵を コロンと産み落としてしまった  
大蛇の卵 グニヤリと割れ 中から 蛇の仔が ムックリ ニョロ  
ニョロ 這いだして

おかあちゃん!  
と呼んだから さあ大変 ビックリ仰天の姪禽 我知らず キュン  
キュンバキューン

手あたりしだいに六穴砲うちまくり ワーワーギヤーギヤー わめ  
きちらす

四大門を閉める!  
出入りを厳禁しろ!

いあわせた者は 一人残らず逮捕しろ!  
人民どもに喊口令を布け!

機甲旅団を進駐させろ! 空軍を投入しろ!  
近衛兵を出動させろ!

きやつらの きやつらの いま美しいイエスなるものを  
ひとかけらも残さず 黄粉にしてしまえ!  
小銃が パンパン

機関銃が タタタタ  
大砲が スドンドン  
戦車砲が ドカーン

飛行機が ヒュークワン ヒュークワン クワン クワン クワン  
四方八方 イエス像を鉄の壁で とり囲むと  
豆を煎るように 火に黍殻がはぜるように ただもう手当り次第に  
撃ちまくったが

あまりに あまりに ちっこい品物だったので 命中するどころか  
手前らどうし 背中穴があくほど撃ちあつて  
ころしころされ こわしこわされ ばらしばらされ  
しまいには ひとり残らず きれいさっぱり ひとつところに亡ん  
でしまったというはなし。

古より かの聖賢方が申されたことに  
ト話を誤解するは大凶のはじまりなり  
兵は不詳のものにて

凶器を乱用するは 自滅のものなりとあるが この教えは すべて  
このようなことをさして 言われた言葉だっただろう。

〔注〕 姪禽は発音によってイムグム(王)に通じる。木寛山はソウル・  
南山の古称という。中央情報部本部がある。辛亥の年は一九一一年  
にあたる。この「六穴砲崇拜」をふくむ「蜚語」三部作がかかれた年。

## 五月雨をあつめて早し最上川

鎌田 慧

島津マサオさんはどうされてるだろうか。  
彼女とは四年ほど前、二、三時間お会いした  
だけなのだが、いまでもよく想い出す。小柄  
で、眼のくりくりした、可愛いお婆ちゃん  
である。そのとき七二歳だった。

さいきん、大分県の臼杵港からフェリーで、  
愛媛県の八幡浜港にむかったことがある。船  
は、豊後水道に突きだされた、四国の尻尾と  
でもいうべき佐田岬半島に沿って港にはいる  
のだが、陽が落ちた海のむこうに、黒々長く  
伸びる岬を船窓から眺めてから、ことさら彼  
女との出会いを想いだすようになったのだ。

佐田岬半島の、瀬戸内海側に、原発の町・  
伊方がある。ちょうど、広島島の原爆ドームと  
海を越えてむかいあって、原発の白亜のド  
ームがたっている。彼女の夫の実さんは、四五  
年八月六日、対岸の上空がピカッと光り、ウ  
ォーンと音がして、キノコ雲がたちのぼった

のを目撃した。

伊方の町から山を越えて歩いていくとちい  
さな船溜りとそのそばにかたまった瓦屋根の  
ちいさな集落がみえてくる。そのちいさな  
家で島津さん老夫婦は暮している。原発反対  
闘争がこの町でもまだ激しかった頃、四国電  
力のボーリング用機材がなにものかによって  
地元では正義の伊方天狗の仕業とささやかれ  
ているのだが、メチャメチャにされたことが  
あった。それから、まいにちまいにち、私服  
が山を越えてはこの部落にやってきた。マサ  
オさんが山へ芋掘りにいけば芋掘りにくつつ  
いてくるし、海岸へワカメを拾いにいけば海  
岸までついてくる。部落の人たちは、みんな  
おびえ、暗い気持ちになっていた。マサオさん  
は無数の俳句をつくった。

芋掘りに山まで来るや刑事さん  
秋の潮寄せては返す刑事さん

秋風に吹かれて寒し刑事さん  
秋の夜さがしもとめる刑事さん  
秋の空むなしく帰る刑事さん  
原子にて歩き疲れる刑事さん

俳句も抵抗の武器になる、ということを知  
ったのは、彼女と会ってからである。話を伺  
ったあと、わたしは帰るといいますと、彼女  
はわたしにしがみつくようにして、ポケット  
というポケットにミカンを詰めこんだ。いい  
です、もういいです、となどと断つても、彼  
女は先になつて道案内するのだった。白い軍  
手をはめた両手を、曲がった腰の上において  
彼女といくつもの坂道をのぼったりおりたり  
した。晴れた日だったが、海から強くて冷た  
い風が吹き、それに乗って、綿虫のような小  
雪がとんでいた。

沖繩の勝連半島で大城ふみさんにお会いし  
たのは、七五年の夏だった。CTS反対闘争  
の取材にいったときに安里清信さんから紹介  
されたのである。住民闘争の先頭にたつのは  
たいがい女である。歴史的にみても、男は文  
明にイカれてフラフラし、女は土に根をはや  
して生きようとすると、ということか。沖繩の  
ひとびとが、「エデン海」と誇る魚類の宝庫

である金武湾に、潮の流れをとめる海中道路がつくられ、その道の上を島と島とのあいだを埋めるためのダンブが走る。そこにヤマトからきた三菱が巨大な石油備蓄基地を建設しようとしていた。そんな途方もない計画にたいして「金武湾を守る会」の安里さんたちは反対している。三菱はカネをばらまき、村長や村議会議長を買収し、暴力団は反対派の集会に殴りこむ。そして工事が強行されることになった。大城さんたちは海岸道路入口にピケを張った。七四年五月である。機動隊が襲いかかったときピケ隊から歌声が起った。

巡查小ぬ位(くれ)ぬ

権利ふりまわち

夜(ゆる)や犬(いん)なやに

女(いなぐ)探(た)て

こつば巡查が弾圧して夜になればこんどはイヌになって女を探して歩きまわらせて。その日の数日前、那覇の巡查が女性のアパートに忍びこんだ事件を大城さんが即興歌にしたのだった。ふしまわしは沖縄民謡の「県道節」である。たちまち機動隊は戦意喪失した、とのことである。デモ隊と歌声といえは、砂川基地闘争での「赤とんぼ」の歌が有名だが、咄嗟に出てくるのがセンチメン

タルな小学唱歌であったのは悲しい。たまたかに悲愴感がにじんでくると、闘争の終りがちかい。県道節はふだんうたいなれた歌だったからこそ、たちまちのうちにピケのおばあちゃんたちのあいだにひろがり、機動隊たちをたじろがせたのだ。

ある青年と話しあったとき彼はこういった。「こうして、泡盛を呑んで、みんなであたり踊ったりしているあいだ、三菱はゼツタイはいつてこれないんだ」

大城さんのところで、彼女がつくった替歌のいくつかを覚えてもらったが、わたしはかんじんの県道節を知らなかった。歌って下さい、ともいいかねた。そのあと、那覇に出てあんまりしつこく県道節、県道節といったものだから、呑み屋のオンナの子にこういわれてしまった。「わかった、お客さん、土木カンケイのヒトでしょう」

三里塚のおつかあたちも強い。

いつだったか、柳川のおつかあの家に行った。みんながおつかあ、ですましているし、本人もそういわれないと不機嫌になるのだが、初枝さんという可愛い名前がちやあんとあるのだ。病気で亡くなった亭主の茂さんは反対同盟の副委員長だった。一人息子の秀夫さんは

はにかみ屋だが、逮捕歴六、七回を数える青年隊の中心メンバーだ。なにしろ大変な一家である。

柳川のおつかああの武勇伝は数えきれない。ある日、集会が終って、暗くなった道をゾロゾロ帰りかけると、機動隊が道ばたで愚連隊よろしくたむろしていた。リンチがはじまりそうなけん悪な雰囲気になっていた。小柄ながらも栄養豊かなおつかあが先頭にたち、道をふさいだ楯をガンガン叩いて「どけ、どける」と叫んで道をあけさせた。わたしはどんな用事があったのかいまは忘れてしまったが彼女の家までついていったのだ。お茶を呑んでひと休みしていると、娘さんが帰ってきた。「牧場のここに変な男たちがいるよ」「どれどれ」

おつかあは懐中電灯を取りだすと豆タンクのように霧進していった。彼女のうちからバス停にむかう農道の右手にちいさな牧場があった。そのしげみの陰に男たちがかくれていたのだった。

「おめえら、そこでなにしているだ」

懐中電灯をむけると、三人の男がまぶしうに顔をしかめた。

「なんでもありません」「なんでもねえたつてよ、そこでなにしているだ。私服だつべや。こ

そこそくさつて、こつちへ出てこい」

おつかあは大声で叫んだ。おつかあのことについていった連中も、それに力をえて、「刑事だろ」「出てこい」「あっちへ行け」と加勢した。三人の男はもぞもぞしていたが、やがてふんざり悪そうにぶつぶついいながら出てきた。そして、三人並んでわざとゆっくりパス通りの方へ帰っていったのだった。

秋草やぶつぶつ帰る刑事さん

二年ほど前、秀夫さんは支援の学生と結婚した。大口マンだった。披露宴のときのおつかあは、いつもに似合わずそわそわしていた。いま、孫の顔をみるのを楽しみにしている。

おつかあ部隊

(石井 英祐)

おい 機動隊のあんちゃん

おめえらのなかには 百姓の息子も

いっだつべ

三里塚のほうきり

でしゃばりやがつてな

百姓らあをいじめ

畑をふんづけたり

おめえらの親らは泣いてつど

ほう突つ込む

そうかそりやあ面白え  
股あひろげて待つてべえや  
さあ此所へ突つ込め  
なあにぐずぐずしてつだよ  
突つ込んでみる ほら  
わあつと笑う おつかあ部隊  
春の日ざしはドギマギと降る  
……………

七八年二月六日の横堀要塞の第一回攻防戦がはじまる日の早朝、駆けつけた石井英祐さんの奥さんは機動隊に楯で殴られて顔面裂傷複雑骨折の重傷を負った。そのとき柳川のおつかあも病気で入院していた。ふたりのおつかあは成田市の日赤病院で管制塔占拠のニュースをきくことになる。

中風の母 傷の妻 子の入試

如何にと思う忘れろしこと

石井英祐さんは横堀要塞に籠城して逮捕された。節子夫人は重傷を負った。その頃ちょうど、長男は医大、長女は高校の入試を控えていた。それでも、ふたりの子どもはそんな状態にもめげず見事に合格したのだった。あとで、節子さんはしみじみ語った。「闘争が子どもを立派に育てるだ」

芸術は完成されて無害なものになってしまふ。完成度の行司は、特権的な評論家がりしきるからである。小説でいえば、たとえば、吉行淳之介や開高健などの退廃的完成をみればいい。「通」ぶりが芸術の基準である。それを打ち破るのは、闘争のなかで生まれた民衆の表現である。あるいは民衆的表現による闘争への詩、である。

佐世保重工では、坪内式封建的圧制が極限にいたり、便所の落書きの花盛りとなった。同盟系御用組合も、便所の落書きを無視できず、ついに近江絹糸争議に続けと人権闘争を呼びかけるにいたった。「再建数え唄」「狂島音頭」「坪内追求節」など労働者たちは怒みこめて、もつか創作中である。ひとつだけ紹介しよう。

ボ 暴君追い出す日は近い

ウ うらみは深し豚野郎

チ 力を合わせて立ち上がろう

ヒ 開き直つた俺たちには

サ (判読不明) はもう効かない

オ 終りに息の根止めてやる

ひとつひとつのあいだに古くから伝わる、表現方法をどのように変革し、革命的な表現を獲得するか、そのことが大事なことだと思ふ。

# 「書堂」小劇場のこと

李銀子

## I

『未来』という小冊子77年12月号に、記録32「一九四一年十一月八日『日本、米英に宣戦布告』という李珍浩さんの記録がのっている。一ページの巻頭言である。

川崎のある小学校では、担任の先生が生徒の前でそれを読み、生徒は感じたままを文字に表した。それらの感想文は李珍浩さんに届けられ、李さんは子供たち一人一人に返事を書いた。それはまた、先生の手で「表札―李珍浩さんとの対話―」という文集にまとめられた。

一つの文章の掘り方というものだろうか、

その小さな記録は、ソダン（書堂）小劇場の台本にも使われたのである。

ソダン小劇場は、〈朝鮮語〉を学ぶ人たちが、テキストにしていた朝鮮の民話を、ペーパーアートにつくったのがはじまりである。それは、劇の登場人物やそれぞれの似顔を描いたボール紙に描いて切り抜き、ワリバシをささえにして作っただけのものだが、一年のまとめとして、同じ「書堂」初級組の前で試演会をもち好評を博した。

## II

ある友人との会話であった。  
自分のところでは、〈あめの会〉という子供

った。

ソダンのメンバーは三名。〈朝鮮語〉をはじめ約一年半。みな日本人である。だれも、それまで何かを演じたことは一度もなかった。先のソダン発表会がはじめての体験である。

相手が子供とはいえ、人前でやるのは大問題だった。私たちは、民話に入る前の、〈前おき〉というものを考えはじめた。

まず、子供たちの〈朝鮮語〉のハンディを押さえるため、登場人物をおなじみの「ウルトラマン」や「鉄平くん」に設定し、視覚に訴えようとした。観客が、子供であること、その子供たちの前で、〈朝鮮語〉で何かをやるのだという意識に私たちはとられすぎた。

しかし、この発端は、日本には日本人だけが住んでいるのではない。なかでも、在日している朝鮮民族の存在を少しでも子供たちに伝えることはできないか、ということであったはずだった。  
これでは、本命の朝鮮の民話のもつ、素朴な笑いもどこかに吹っ飛ばしてしまおうだった。日本語でもよい。どうしたらそのことを、

子供たちに伝えられるだろうか。

私たちは再び話しあった。それでも〈朝鮮語〉を学ぶことを通し、いろいろと話しあってきたが、在日する朝鮮民族の存在について、このように総括的な話し合いになったのは、はじめてだったと思う。

だんだんとつくられてゆく台本も、メンバーのある体験をもとにふくらますことにした。そして、内容を興行きのあるものにするためにも、李珍浩さんの『未来』に載ったあの〈記録〉を台本に取り入れることにした。

（ものがたり）は、何度となく手を入れ、つくられていった。

## III

ある日のこと、仲よしの順ちゃんが学校を休んだ。

A 順ちゃん、今日どうして学校やすんだのかしら？

B かぜでも引いたのかな――。

C お家に行ってみようか？

A B うん。

――順ちゃんの家――

同 じゅーんちゃん、あそぼ！

順 （奥から）はあーい。

会をやっている。月に一度、近所の子供たちを集め（おはなし会）をはじめたが、そこには「在日朝鮮人」の三世が、二、三人来てるという。

ある日、そのうちの一人が娘にむかい、「ぼくはかんこく人だけど、君なに人？」と聞いてきた。ところが、娘はそれに答えられず「ママ、あたしってなに人？」と問い返したという。

友人は、「あなたは日本人よ」と答えたもののそれ以上のことをどう話したらよいかわからなかったという。

例えば、その三世の男の子は「韓国」ということばを使ったが、他に「朝鮮」ということばがある。しかし「朝鮮」や「韓国」がどこにあるのか知らないし、どんな（ことば）を話すのかもわからない。それにも増して、同じ環境に生まれ、自分とどこも変わらない同じ（ことば）を話し生活する友が、どこか違うものを持っている。その不思議さを、子供たちは感じていたのではない。

そんな話から、一度「朝鮮」について何かやってくれないかということになり、それではと、前にソダンで作ったペーパーアートを、子供たちの前でやってみようということにな

B わーあ、きれいな服！

順 あつ、これ？ これはね、朝鮮の服でチマチョゴリっていうのよ。

A どうしてそんな服着てるの？

順 だって、あたし朝鮮人だもの。日本人もお祭りの日にきもの着るでしょ？

C じゃ、今日は朝鮮のお祭りなの？

順 そうなの。だから学校休んじゃった。

A 朝鮮のお祭りって？

順 チュンク（秋夕）っていうのよ。秋の満月の日に、ご先祖さまにあいさつをするの。

同 へーえ。

順 おうちへあがって。今日はすごい、ごちそうなのよ。

――順ちゃんの家には、見えない朝鮮の、ごちそうが沢山並んでいた。

C これは何という食べ物？

順 それはキムチ。朝鮮のおつけもの。

これはソンビョン。朝鮮のおもち。

A じゃあ、これは？

順 それはチョッカルよ。そうね、朝鮮の串焼つてところかな？ どんどん食べてね。

B キムチって赤いのね。すこし辛いみた

い。  
順 それは白菜だけど、きゅうりやだいごんのキムチもあるのよ。

C 順ちゃんが朝鮮人だつてこと知らなかつたな。

A そうですね。

B じゃあ、朝鮮語で「こんにちは」って何て言うの？

順 私もね、つい最近おそわつたんだけど「アンニョンハセヨ」って言うのよ。

二同 アンニョンハセヨ？

順 そうよ、うまいわ。

A 「ありがとう」はどういうの？

順 コマブスムミダ

B コマブスムミダ？

順 そう。お母さんはオモニ、お父さんはアボジって言うのよ。

二同 へーえ。

父 奥から、父親の呼ぶ声がする。——

父 スニ……スニ、こつちへおいで！

順 はあーい、アボジ。

A いま、なんて呼ばれたの？

順 私の名前はね、本当はスニって言うの。スニ？

順 そうよ、朝鮮語で言うの。学校では私、木原順子って名前つかっているけれど、本当はね「イ、スニ」って言うの。

C どうして名前が二つあるの？  
順 これはね、アボジから聞いた話しなんだ。

——暗転。

影絵。李珍浩さんの「記録」。

ナレーション——

○ぼくが七つの時、日本は戦争をしていた。

○朝鮮は日本の植民地で、ぼくのアボジは日本にむりやりつれてこられた。

○日本で生まれたぼくは、国民学校に入学すると、「木原珍浩」と名のつた。

○ぼくはこの名前が嫌だまらなかつた。

○家では「ジノ」と呼ばれていたが、学校では日本語読みの「チンコウ」になったのだ。

○しかしぼくは、日本が戦争に勝つと、とてもうれしかった。

○「お父ちゃん、日本は強いよう。アメリカの軍かんをやつつけたんだよ」と学校でおそわつたとおりのことを言った。

○ある日、学校の先生が来てこう言った。「今日からお前の息子は直太郎だ。正直な人間という意味だ。わかつたな」

○父はとても悲しい顔をしていた。

○しかし事情のみこめないぼくにとつて自分の名前が「チンコウ」じゃなくなると思ふとうれしくて、その晩ぼくは新しい名前を何回も何回も、ふとんのなかで口ずさんでは、眠れなかつた。

○その後、ぼくは「木原直太郎」として日本の軍隊に入るため、一所懸命勉強をした。

○しかし日本は戦争に負けた。ぼくは玉音放送を聞いて涙を流した。

○父はちがつていた。父は、聞きおぼえのないことばで、「イルボニチョッタ（日本が負けた！）」と叫び、「木原」と書かれた表札を地面にたたきつけて、「マンセ、マンセ」と叫んだ。

○そして、「ジノ！ お前は今日から「ジノ」と言えるんだぞつ」と言つては、とても喜んでいて。——暗転——

順 でもね、それから日本でも生きていくためには、本名の「イ・ジノ」はなかなか使えなくて、それで私も学校ではまだ「木原順子」を使つてるの。

A 私たち、いつも順ちゃんと遊んでいるけど、そういうことちつとも知らなかつた。

順 そうだ。今日これからね、オモニ、アボジと一緒に、うちで人形劇をやるの。

見ていかない？  
二同 うん。そうしよう。

場面転換。たいこの音。アリランの合唱。  
これより民話劇、「ミリヨナン サラムデ

ユル（愚かな人びと）」に入る。（略）

#### IV

台本は、すべての（在目）について触れられている訳ではなく、まだまだ不備な点などあると思う。

例えば順ちゃんのセリフ、「でもね、それから日本でもくらしがゆくためには……」というセリフは、芝居の流れから言えば、あるいは必要のないものだったかも知れない。しかし、（在目）の現状を語ろうとするとき、それはやはり必要だった。

（朝鮮人）は、日本の敗戦でたしかに解放をむかえたが、それは真の解放たりえたであらうか。（在目）の一世は、本名と通名（日本名）を使いわけることにより、もちろんいろいろな歴史はあるだろうが、ある意味で日本社会に潜伏したのだと思う。かつて、私にも通名を使っていた経験があ

る。もちろん今でも、どちらを使うのか判断を強いられるときがある。それはその（場）の空気がそうさせる。

通名は、その（場）のしぎには良いが、長くそこでつきあおうとするとき、どこか心の片すみに別の世界をつくってしまう。そしてややもすると、そこへ逃げてしまいたくなる。しかし、本名を名のことだけを、子供たちに美化してはならない。本名を名のつたなら、その名で生涯生きてゆける強さが必要だし、名のれる空間をつくつていかなければならぬ。それは子供だけに強いるものではなく、親も、本名を名のれる基盤をつくつていかなければならないと思う。

本番をむかえたソダン小劇場公演は、子供

### 《次号予告》

- 三里塚より——ワンパック野菜のピラと詩
  - 地域自立をめざす川崎「石の会」活動報告——ハリと空手とまつり
  - 「キャバレー金芝河」山科鉄工公演記ほか
- 二月十日発行予定・定価二〇〇円（予約購読のお申込みと御送金は水牛編集委員会あて郵便振替口座—東京・四一九一七九二、または現金書留でお願いいたします。購読料・半年一八〇〇円、一年三〇〇〇円）

たちに好評だった。劇中の「アンニョンハセヨ（こんにちは）」や「オモニ、アボジ（お母さん、お父さん）」などのことばは、直に受けとめられ、子供たちは反射的にそれを言つてのけた。

しかし、チヨゴリ（朝鮮の民族服）を着て伽倻琴（カヤグム）を弾いた私に、ある幼稚園児が、「お姉ちゃん、飛行機に乗ってきたの？」と尋ねられたときには（これには多分に地域性があると思うが）、こちら側の思い入れだけでは、まだまだ子供たちには十分に伝わらないことを知った。

ともあれ、ささやかだが、こんな体験をもつことで、ソダン小劇場は、（朝鮮語）の一つの学び方になつたのではないか。

# サトウキビ畑の即興劇

堀田正彦

## 一、ある失敗

フィリピンは雨期の真最中だった。  
「地域活動家のための演劇実践教室」は、  
フィリピン中部の、ある町で、二日前から始  
まっていた。

「オマエ ハイ ツ クルノカ？」

という電報が届いた時、ぼくはマニラで、  
降りつづく雨と宿舍の天井で夜通し廻りつぱ  
なしの扇風機（同室者がいるので勝手に消せ  
ない。それに消したとたん、暑さと蚊の大群  
に襲われるのだ）のせいで悪性の風邪にかか  
っていた。発信者は音楽家のG君だった。彼  
はその「実践教室」の準備のため、すでに、  
一週間前にその町へ入っていた。どうやら熱  
も下がりはじめたし、なによりこのチャンスを  
逃がしたくなかった。ぼくはその翌日、マニ  
ラを發った。

その町へ行くには、島の空港からバス乗り

場まで行って、数時間おきに出るバスをつか  
まなければならない。ぼくは飛行機から降  
ろされる荷物を待つ間に、となりのパロン・  
タガログを着た紳士に、その町の名前を出し  
て乗り継ぎの方法を確かめようとした。次の  
瞬間、その紳士は体ごとクルリとぼくの方を  
振り向くと鋭い口調で、

「君は……日本人だろ？」

「そうだ。」

「日本人がそんな町へ、なにしに行くんだ

？」

「……」

「観光客だろ？ ちがうのか？」

と、矢継早の質問を浴びせて来た。

聞く相手を間違ったのはぼくだ。熱のせい  
で、日頃の勤が働かなかったのだろう。ここ  
らの目を見据えて放さない鋭い目と、たまた  
まかけてくる尋問の口調には、わけもなくひと  
をゾッとさせるものがあつた。

「マニラで知り合った友人が、是非遊びに  
来いって招待してくれたもんでね……」  
と、ぼくはどうやら答えた。  
「観光客なんだね、君は？」  
と念押しするようにいうとその紳士はふつ  
と表情を変えて、その町までの概略を教えて  
くれた。

荷物が降りてきた。

リュックを背負って歩き出したぼくは、丁  
度迎いの車に乗り込む彼とまたぼつたり顔を  
合せてしまった。彼は、つと手を差し出して  
ぼくの手を握ると、ぼくの目をのぞき込みな  
がら、こう自己紹介した。

「私はフィリピン治安警察軍のK中尉」

（あつ、これは「踏絵」だな）と直感し  
たぼくは、とりあえず買春ツアーに血道をあ  
げるジャバニーズ・ツーリストに間違えられ  
ることを、自分に許した。

（フィリピン治安警察軍・中尉）などとい

う難かしい単語はまるで理解できない、それ  
は何だ？ というぼんやりした顔でモゴモゴ  
と返事をする、中尉はやつと握っていた手  
を離してくれた。

フィリピン治安警察軍（略称PC）こそゲ  
リラ、農民弾圧の主役である。PCの中には  
「殺しのライセンス」を持った軍人がいると  
いわれている。ある島では、ここ数年で、ト  
ラック一台分の農民を虐殺したといわれるP  
Cの軍曹が、昨年、何者かによって暗殺され  
た。その軍曹の葬儀には、軍司令官からの感  
謝状と弔電が届いたという。

「私服のPC」の、しかも中尉に握手され  
たぼくの右手は、じつとりと汗ばんでしまっ  
ていた。彼の手は、確実に何人かの農民を殺  
し、無実の人々を殴り、拷問した手だ。

「地方へ来たな」

という実感が、冷たい緊張となつて背筋を  
走らせた。

## 二、演劇実践教室

一面のサトウキビ畑に、太い雨が降る。

雨しぶぎに白く霞むサトウキビの畑の中に、  
ボツンと立っている教会付属の施設が「演劇  
実践教室」の行なわれている場所だった。だ



が、その建物は、広漠とした周囲の様子にそ  
ぐわぬ立派なものだ。何故なのか。それには  
理由がある。この建物は周辺の大農場主たち  
の寄付によつて建てられたのだ。しかし、建  
てられた直後、教会と金持たちとの関係が急  
に悪くなった。教会が農民たちの側に立つよ  
うになつたからだ。七〇年代半ばから、民衆  
の苦しみが増すにつれ、急速に民衆の側に傾  
斜する教会が増大している。

「自分たちの金で建ててやった場所を、百  
姓や貧乏人に使わせて、しかも自分たちに盾  
つかせている、というので、この場所は金持  
には非常に評判が悪いのですよ」

と、参加者たちの責任者である神父が笑  
ながら語ってくれた。

「でも、ここなら、いくらPCでもいきな  
り踏み込むということはありません」

つまり、この土地では、教会の権威に対す  
る礼儀を軍がまだ幾分わきまえているという  
ことになる。

では、このような場所で行なわれる「地域  
活動家のための演劇実践教室」とはどんなも  
のなのだろうか。この「教室」のねらいを、  
その基本的姿勢、表現方法、集団づくりの原  
則という三点から、浮き彫りにしてみよう。

まず、基本姿勢である。

これは、この「演劇実践教室」運動の目的  
ということだが、きわめて具体的な目的が二  
つあげられている。ひとつは、

（参加者個々が持つている「フィリピン社  
会の現状」に対する批判的姿勢を、彼らの観  
客となる人々の生活や、地域社会の実状に即  
して、さらに具体的なものにしていくこと）  
であり、ふたつめは、

演劇の持つ可能性をフルに活性化することによって、民衆が生きるべき社会とは何かということ、民衆自身が自ら発見するための手助けをする。

ということである。そしてこの第二の目的を達成するために、

「次の諸点を区別できる「技術」を身につけられるようにすることが必要だ」として示されている。その諸点は、

①上演している芝居のテーマと、その芝居の題材となった現実の問題との間に喰い違はないか？

②観客の意識は、次の四つのレベルのうちどのレベルにあるかを区別できるか？

(1)現状に打ちのめされた意識。

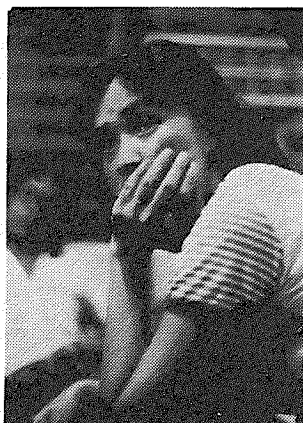
(2)なにかにクソツという気持はあるが、十分にかたちになっていない意識。

(3)筋の通った批判力をもつ意識。

(4)解放を志向する明確な批判的意識。

③一緒に芝居を演じている仲間が、その題材になっている問題を正しく理解しているかどうか？

④村や地域の問題が、国家あるいは世界的規模の問題とどのように関連しているか？  
という、それぞれがきわめて具体的なもの



として示されている。

では、このことは、どのような表現方法を通して行なわれるのだろうか。

表現方法としてこの「教室」が挙げているのは、体操、即興劇、詩、図画工作、音づくり、唄、台本作り、マイムである。「教室」は、それらを総合した二週間のカリキュラムを作り、(参加者全員を密度の濃い演劇芸術の実験室に投げ込むころみを行う)

と、自己規定している。なかでも、

「ものの形、空間、ことば、自然、自分自身、他人、集団、ということの発見に注意を集中しながら、身近かなものを使って「即興劇」を作る」ということが中心になっている。そして、これらの即興劇を引き出しやすくするための

枠組として、

「詩を劇化する。現実を劇化する。歴史を劇化する。寓話、民話を劇化する」という四つのスタイルが提示されている。

実際にこの作業に参加した者としての感想を述べれば、この作業は、自分が在り、他人が在り、自然が在るならば、どんな所でも、どんな人にも芝居が作れ、それを楽しむことができる、という事実をきわめて明快に教えてくれるものであったといえる。

つづいて、第三の点、集団づくりの原則と

いうことについて述べてみよう。  
それは、この「教室」に参加する者に与えられる、次のような「注意」に現われている。  
(参加者は、心をひらき、信じ合い、繊細で柔軟な気持を持ち、チームワークを重視し、自分の果すべき役割、あるいは、自分の限界を明確に示して、個人、グループを問わず創造的な雰囲気を作り上げるよう、助け合うこと)

(参加者はお互い最大限の能力を引き出し合うよう努力し、それぞれの現場に帰った時に役立つような技術や知識は、すべて惜しみなく与え合うことがぞましい。批判と自己批判を惜しみなく行なうこと)

しかしこれは、たんなる「注意」としてあるのではなかった。むしろここに書かれてあるような人間関係を現実とその場に作り出してみせることこそが、この「教室」の主催者たちの本当のねらいであり、そのために「演劇」という芸術が活用されているのだ。ここ

では「人間関係の正しいあり方の中で演劇を作る」ということと、「演劇をつかって人間関係の正しいあり方を作り出す」ということが、きわめて弁証法的な関係のなかで息づいている。そして、実際の現場にもすぐれて「人間的な」楽しさがあふれていたというのが、ぼくの実感である。

### 三、即興劇

雨が降り続いてた。  
部屋の窓から、小高い丘に立つ数本の椰子の樹が見える。生い茂った葉が白い雨の中で柔らかな影絵のように揺れている。

最年少の参加者、十四才のCが、頭が痛いという。首筋を指圧してやりながら、

「どうしたかねえ？」  
と聞くと、

「あたい、こんなに頭使うことなかったもんな。使い過ぎなんだよ。きつと……」

と、笑っている。

「教室」はすでに五日目に入っていた。朝七時に体操が始まり、午前四時時間、午後五時時間、そして夜も四時間から五時間。ときとして深夜まで作業が続くこともある。

ひとつの課題が与えられ、説明があり、自分たちでやってみる作業があり、発表し、評価し合い、ふたたび作りなおす。合い間に、ゲームや唄や、気分転換の休憩が入る。これでは一日が消える。話し合いに徹底的に時間をかけるからである。すべての作業に、批判と自己批判を自由に徹底的に行なうことが求められている。参加者は、まさに「密度の濃い演劇芸術の実験室に投げ込まれ」ている。

それは、普段、朝五時の夜明けとともに起き出して畑の労働をし、午後は市場で果物を売るといふCにとっては、まるで異質な時間であり、体験である。相当な緊張なのだろう。だが、彼女の全身からは、ここに参加していることが楽しくてしょうがない、という雰囲気気がにじみ出ている。

音楽家のG君は、都市で行なわれた学生中心の「教室」と比較して、

「地方のひとたちの方が、ずっと知的で集中が深いんだよ」



と語っていたが、ぼくのこの「教室」に対する第一印象も、全く同じだった。それは農民が、彼らの只今の生活の中で直面している問題(貧困、軍隊による抑圧、外国資本による資源収奪)の深い歴史性と世界性を、自らの身体を通して理解しているということに他ならない。参加者たちは、この「実践教室」のプロセスを通して、それらを身体から解き放ち、ことばや動き、音として形を与えてい



く。そして、自らに投げ返し、理解し、解決の方向を見出して行く。この発見のプロセスにおける彼らの深い集中と喜びが、その知性として表出してくるのだ。

たとえば、五日目の夜に行なわれた、二十四人の参加者全員による「即興劇」は、そうした知性が集団として表出する瞬間の素晴らしさを見事にあらわしていた。

この時のレッスンは「即興」というものを知るためのものだった。午前中にやったのは、手近にある音の出るものを使つての「ジャム・セッション」。参加者は、バケツや空カン、竹や木の葉、パイヤの茎で作つたラッパなどをさがし出してきた。音楽家のG君が、基本のリズムを取りながら次々にいろいろな音を出させていく。そのうちに、相手の音を聞きながら、自分の音を出して、他の人と音で対話をするという課題が与えられる。こうして「即興」という抽象的概念を理解する素地が与えられた。続いて午後は、即席の衣裳や小道具の作り方のレッスン。素材を発見し、どう使っていくか、その即興性と創造力が強調される。衣裳や小道具を用意する十分なお金は、どの参加者にとつても望むべくもないことなのだ。蚊屋が即席のドレスになる。バ

スタオルをつないでロープを作る。みんなあつたけの知恵を出して、自分の身の廻りにいる人々、好きな人、嫌いな人、成りたい人、成りたくない人、それらの人に変身していく。やがて「村人」たちができあがつた。

リーダーが指示を出す。

「その衣裳の間はどんな風に歩く？」

全員、その人間になつたつもりで教室の中を歩き出す。老人、金持、身重の女、労働者、農民。それぞれが村の生活を思い出しながら歩く。肩で風を切る金持、疲労に打ちのめされた農民。兵隊に扮したひとり、いきなりその農民を足蹴にする。駆け寄る女たち。

「ここはみんなの村だ。しゃべるんだ。その役の人間としてしゃべってみよう！」

リーダーがふたたび指示する。

いまや、教室は一つの生きた村と化した。農場主を取り囲み、口々に労賃の値上げを要求する村人たち。「方言」がわからぬというふりをして、村人から逃れようとする農場主。村人の代表をかつて出る学校の先生。マシガンで威かくする兵隊。

それは、第三世界の民衆でなければ生み出すことのない筋書きのないドラマだった。

(つづく)

## 目次(第二巻第一号)

声の輪をまわせ 高橋悠治 1 / ただひとつだけ  
けを言い切ることが出来る 湊川の田中正造  
劇・竹内スタジオの記録 4 ■「からだ79」の  
こと 高田豪 ■私の体験・その一 惣川修 ■  
「田中正造」をやつて 三好哲司 ■湊川の「田  
中正造」 小川正巳 / 水牛雑感 畑野潤 14 /  
六穴砲崇拜 金芝河 16 / 五月雨をあつめて早  
し最上川 鎌田慧 21 / 朝鮮語の学び方 ①書堂  
小劇場のこと 李銀子 24 / サトウキビ畑の即  
興劇 堀田正彦 28

水牛通信 一九八〇年一月号

一九八〇年一月十日発行

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町二一十五 八巻方

電話(03) 425-9658

印刷 (株)トライプリントショップ

定価二〇〇円